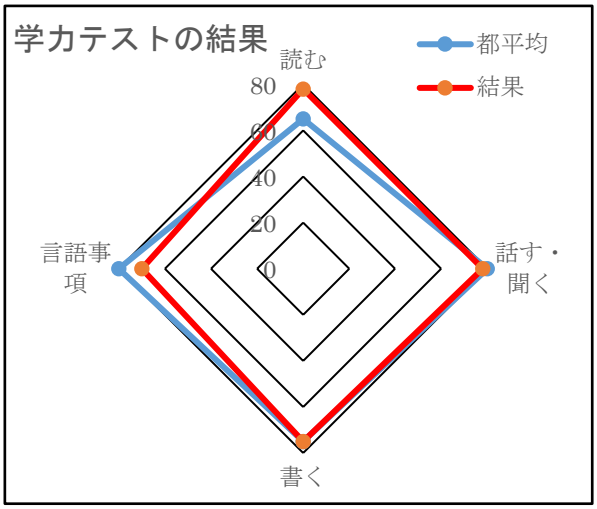
第５学年　国語科

児童の実態（7 月現在）



＜実態の分析＞

観点別結果の分析

（話す・聞く）おおよその内容は掴めるが、細部の聞き取りが不十分な傾向がある。

（書く）主語述語の違いや、順序を表す言葉など、基本の理解が不十分な児童がいる。

（言語）漢字の読み書きや言葉のきまりの理解が不十分である。

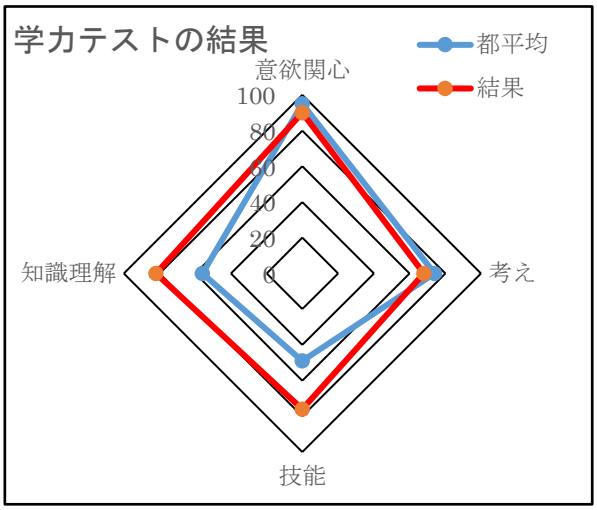
＜指導方法の課題＞	＜具体的な授業改善策＞	＜補充・発展指導計画＞
[課題設定] 年間指導計画に沿って、各単元ごとの学習課題を毎時間掲示し、各時のめあてを提示している。	[課題設定] 今後も続ける。	[補充的な学習指導] ・漢字練習ノートを整え、国語の時間以外でも時間があるときは漢字練習を行うことを習慣化させる。 ・週末に日記の課題を設定し、正しく文章を書く力を養う。 ・毎日、音読暗唱を行い、語彙や言葉での表現を増やす。
[学習形態] 小グループ活動の場面では、作業が遅れていたり、自分の考えを十分にまとめきれずに参加が不十分な児童がいる。	[学習形態の工夫] 小グループ活動の機会を増やし、発表に慣れさせる。友達の発表から良い点を取り入れらるよう指導する。	
[発問・指示・板書計画] 板書をノートに写すことはできるが、見やすいよう工夫して書けるようにしたい。	[発問・指示・板書の工夫] 板書の際、色を変えて表示したり、行の使い方の工夫を分かりやすく示し、ノートを書く時間を増やす。	[発展的な学習指導] ・図書指導で、1 学期に十進法の指導を行った。特に調べる活動について、今後も指導を段階を踏まえて行い、図書を使った調べ学習の力を養っていく。国語科以外の学習でも活用していく。
[教材の活用] 1 学期途中から教材を大きく提示することで一定の効果が得られた。	[教材の工夫] 音読活動の助けとなる、音声教材を用意する。	
[評価の方法] ノート、各種テスト、発言等	[評価の工夫] スピーチ等で児童間での励ましを増やしたい。	

＜評価・修正＞

［評価］「話す・聞く」内容を把握しながら話を聞ける児童は増えてきたが、できない児童もまだいる。話の中心を掴めている児童がほとんどであるが、例示と中心の違いが分からない児童も多くいる。

［修正］　話し手を見て、気持ちを読み取りながら話を聞く姿勢を身に付けさせる。

第５学年　算数科



児童の実態（7 月現在）

＜実態の分析＞

観点別結果の分析

○（考え）考えをまとめたり発表したりすることに課題がある。

○（技能）計算の技能はおおむねよくできている。

○（知識・理解）既習事項を結び付けて考えることができている場合が多い。

＜指導方法の課題＞	＜具体的な授業改善策＞	＜補充・発展指導計画＞
[課題設定] 児童が意欲的に学習に取り組むことができるようにしていきたい。	[指導] 日常に関連した設定をすることで、児童が必要感をもちながら学習に取り組むことができるようにしていく。	[補充的な学習指導] 個別で指導する時間を確保する。 ヒントカードを用意する。
[学習形態] 教師との対話だけでなく、児童間での対話を通して課題を解決できるようにしていきたい。	[学習形態の工夫] 小グループで活動する機会を増やし、児童一人一人が自分の考えをもてるようにしていく。	
[発問・指示・板書計画] 自分の考えをノートに書いたり発表したりして表現することに難しさを感じている場合が多い。	[発問・指示・板書の工夫] 分かりやすい発問で指示を短くし、児童が考える時間を増やしていく。	[発展的な学習指導] 発展的な学習のプリントを用意する。 答えを導くまでの別の過程を考えさせる。
[教材の活用] 授業のめあてとは関係ない用途で教具を使っている場合があった。	[教材の工夫] 電子黒板と具体物を、必要に応じて使い分けていく。使い方も分かりやすく示していく。	
[評価の方法] ノート、テスト、ワークシート、発言等	[評価の工夫] 継続していく。	

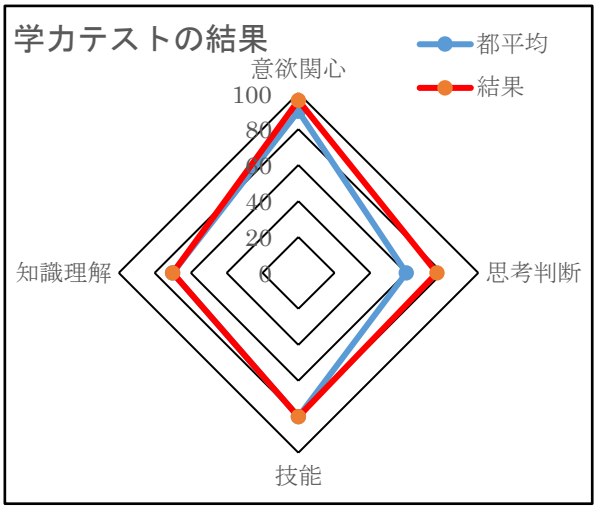
＜評価・修正＞

[評価]図形を扱う単元では、それぞれの習熟度で個に応じた指導を行うことができた。またレディネステストを行うことで、単元ごとにコースを変える児童も見られた。

[修正]習熟度別のコースの中でも学習の進度に個人差が生まれてしまう。様々な解き方があることを理解するのは大切だが、それが負担になってしまう場合もあったので、状況によっては広める考え方は精選する。

第５学年　社会科

児童の実態（7 月現在）



＜実態の分析＞

観点別結果の分析

（思考・判断）社会的事象の原因や効果などを予測したり考えたりする力が弱い。

（技能）資料等の読み取りはおおよそできている。

（知識・理解）既習事項の理解が足りない。

＜指導方法の課題＞	＜具体的な授業改善策＞	＜補充・発展指導計画＞
[課題設定] 年間計画の沿って、毎時間の課題を板書して提示している。	[課題設定] 児童の関心意欲を喚起できるかを吟味しつつ、今後も続けていく。	[補充的な学習指導] 地名や語句など、暗記すべき項目がたくさんある教科なので、毎時間の振り返りで地名や語句などは確実に理解し覚える時間を設ける。
[学習形態] 資料を各自で調べてまとめる学習において、インターネットだけで資料を集めようとする傾向がある。	[学習形態の工夫] 国語科と連動して、図書の活用を進めていく。	
[発問・指示・板書計画] 資料を見て考察する力を養いたい。板書で児童の意見を表示してきたが、ノートを書くことに時間を費やしている。	[発問・指示・板書の工夫] ワークシートを活用し、考えたり、発表したりする時間をできるだけ多く確保する。	[発展的な学習指導] 授業を通して生まれた疑問や興味について、更に深く探究していく意欲を育てたい。調べたことや考えたことを表示できるワークシートを常備している。今後、マンダラート等の使い方も指導し、多くの児童が個別の課題に取り組むようにしたい。
[教材の活用] 資料集や地図帳、教科書など教材の種類が多く、電子黒板に提示するのに作動に時間を要した。	[教材の工夫] 予めＴサーバーに資料を集めておき、作動時間を短縮する。	
[評価の方法] ノート、ワークシート、テスト、発言等	[評価の工夫] 今後も同様に進めていく。	

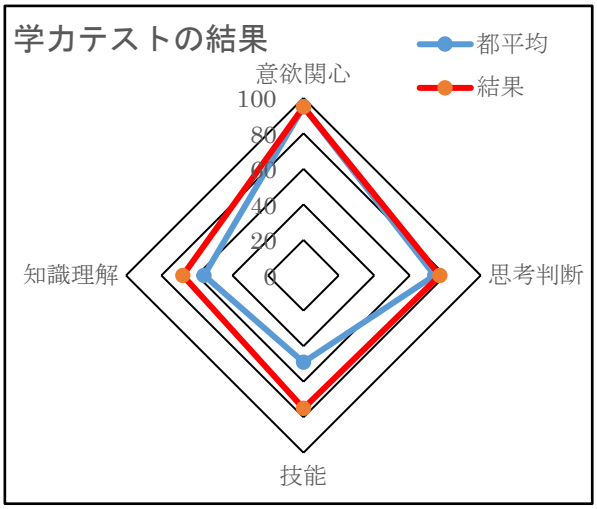
＜評価・修正＞

［評価］　学習したことの中から、自分なりの課題を見付け、資料等を探して文章等にまとめることができるようになった。

［修正］　調べたことや学習したことの中から、自分なりの考えや意見、結論へと導くことに難儀する場面が見られる。全体を見通して調べたり、表現したり、伝えたりしていく学習を今後も継続する。

第５学年　理科

児童の実態（7 月現在）



＜実態の分析＞

観点別結果の分析

○（思考・判断）疑問をもちながら学習課題に取り組むことができている。

○（技能）関心をもって実験や観察に取り組めているため、大変意欲的である。

○（知識・理解）事象の理解はできているが、用語の使い方にとまどっている場合が多い。

＜指導方法の課題＞	＜具体的な授業改善策＞	＜補充・発展指導計画＞
[課題設定] 実験の結果を知っている児童が多く、興味・関心のもたせ方が難しい。	[指導] 自分の予想を発言ではなく、ノートに書かせるようにし、児童の「わくわく感」を保っていきたい。	[補充的な学習指導] ３・４年生の時に行ってきた学習を想起させてから学習に取り組むことで、「まったく知らない」ではなく、「前に習ったかも」という感覚をもって授業にのぞめるようにしていく。
[学習形態] 実験や観察以外は、個人での活動の場合が多い。	[学習形態の工夫] 実験や観察以外の分野においても必要に応じて変えていく。	
[発問・指示・板書計画] 理科室での実験器具の操作について、説明を理解できていない場合がある。	[発問・指示・板書の工夫] 可視化して説明したり、安全に実験を行うことの必要性を話したりして、責任感をもって活動できるようにしていく。	[発展的な学習指導] 授業で扱うこととは別の事例についても単元の後半で触れる等の工夫をして、知識・理解を広げたり、深めたりしていけるようにしていく。
[教材の活用] 「植物の発芽」「植物の成長」「めだかのたんじょう」等の単元では、生き物を扱うため授業のタイミングと、成長の過程を合わせることが難しかった。	[教材の工夫] 観察が難しい場合は、必要に応じて電子黒板の映像を使って指導をしていく。	
[評価の方法] ノート、各種テスト、ワークシート 発言等	[評価の工夫] 継続していく。	

＜評価・修正＞

[評価]予想し、実験することで興味を引き出すことができた。映像資料も豊富に活用したことで、児童は視覚的にも理解することができていた。

[修正]児童の疑問から実験に繋がるように指導すると児童が必要感をもって実験に取り組めると感じた。「楽しい実験」で終わらないように工夫していく。

第５学年　体育科

児童の実態（7 月現在）

＜実態の分析＞

観点別結果の分析

○（意欲・関心）全体的に関心は高いが、個人差が大きく二極化している。

○（思考・判断）ポイントを理解した後、どのように工夫するか考えることに課題がある。

○（技能）これも個人差が大きい。中でも走・投能力においては差が大きい。

＜指導方法の課題＞	＜具体的な授業改善策＞	＜補充・発展指導計画＞
[課題設定] 技能面で差が大きく、全体のめあてが実態に合わない場合がある。	[指導] 一人一人が自分に合うめあてを選んだり決めたりできるようにしていく。	[補充的な学習指導] 課題を解決するための補助器具や学習カードを効果的に活用できるように声を掛けていく。
[学習形態] 伝え合ったり、教え合ったりしながら学習することに難しさを感じている。	[学習形態の工夫] ポイントを明確にし、どのような声掛けをすれば良いのか児童に理解させる。	
[発問・指示・板書計画] 自分またはチームの良さや課題に気付けていない場合が多い。	[発問・指示・板書の工夫] 個人・チームが、良さや課題に気付くことができる声掛けをしていく。	[発展的な学習指導] 自分の課題に合った技を選択して行うことができるように、計画的に単元を構成していく。
[教材の活用] 補助器具や学習カードを効果的に活用できていない場合がある。	[教材の工夫] 補助器具や学習カードを課題に合った使い方ができるように声を掛けていく。	
[評価の方法] 観察・学習カード	[評価の工夫] 観察及び学習カードを用いた評価を継続していく。	

＜評価・修正＞

[評価]跳び箱運動やハードル走では、伝え合う活動は児童がその活動の効果を理解してできた。また、個人のめあてに関しても技のポイントをよく理解して立てることができた。一方、チームで活動する領域においては、作戦を立てる経験を積ませていく必要があると感じた。

[修正]補助器具を自分の状況に合わせて選ぶことに関しては、殆ど指導することができなかった。自分の課題の解決方法を考える際に、補助器具の活用が児童の選択肢の１つになるように指導していく。